様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０１２９

研究課題名（和文）ドイツ・モデルネ文学における幼年時代の記述可能性

研究課題名（英文）Describability of early childhood in modern German literature

研究代表者
岡本　和子（Okamoto, Kazuko）

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：５０４０７６４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、非言語的な領域である幼年時代の叙述は、子どもの言語獲得を叙述することにほかならない、との認識を得たうえで、次の三つの成果を挙げた。①ヴァルター・ベンヤミンの著作における子どもの言語獲得は、物質に取り巻かれたモデルネの子どもの「模倣」と「蒐集」という行為によってなされていることを明らかにした。②クレメンス・ブレンターノにおける子どもは、言語を学びつつある存在として規定できることを明らかにした。③ベンヤミンの著作の翻訳に携わり、その成果を踏まえて、日本におけるベンヤミン翻訳・受容についての歴史と現況を、ベルリンの芸術アカデミーにて発表した。

研究成果の概要（英文）：My research verified that the childhood, a kind of nonverbal sphere, becomes describable, when it is described as language acquisition. My research achievements are focused on following three points. 1. Analysis of Walter Benjamins oeuvre: In his works, the modern children are surrounded by many things from material culture. They acquire language by mimicking and collecting them. 2. Analysis of the child in Clemens Brentanos works: The child is an existence which are just in learning language. 3. The translation of Benjamins works. With this experience, I talked on the translation and reception of Benjamin in Japan at a symposium held in Berlin by Walter Benjamin archive.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ベンヤミン　ブレンターノ　幼年時代　言語　ドイツ文学　モデルネ

１．研究開始当初の背景

本研究は、言語および芸術において「子ども」はいかなる意味をもっているか、という問題に対して、ドイツ近代文学研究という立場からアプローチするという、私のこれまでの研究の一部をなしている。本研究の前段階の研究テーマ「ドイツ・モデルネの芸術理論・言語理論における子どもの意味―ベンヤミンを手がかりに」の追究においては、ベンヤミンにおける子どもというテーマ圏の中心には言語の獲得という問題、すなわち言語と非言語の境界の問題がある、ということが明らかになった。子どもというテーマが言語表現の領域において特異な位置を占めるのは、子どもが非言語的な側面を担う形象だからである。しかし非言語的な領域は、そのまま言語表現として記述することはできない。そのため、文学や言語・芸術理論は、非言語的な領域の記述を、非言語的な領域に対する境界（言語の獲得）の記述として行っているように思われる。そこで本研究では、子どもの言語獲得をテーマとする作品や理論的叙述をすべて、子どもの非言語的な生を記述する試みとして捉え、子どもにおける非言語的な要素をクローズアップすることによって、言語および芸術における「子ども」の意味を綜合的に明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、幼年時代を「言語をもたない生の歴史」として捉え、非言語的な領域としての幼年時代はどのようにして記述可能となるか、という問題を、ドイツ・モデルネ文学研究の立場から考察することである。言語・芸術理論から見た子どもとは、あらゆる芸術の根本にある言語の獲得という行為を端的に示す存在であると同時に、言語をもたない状態と言語獲得との境界上にある存在でもある。本研究では、１９世紀から２０世紀初頭にかけてのドイツ文学および言語・芸術理論において、幼年時代という非言語的な生の歴史を言語化するためにどのような試みがなされているかを検証し、文学における幼年時代というテーマの意味を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために、具体的に次の４つの問いをたてて研究を進め、さまざまな分野や形態による幼年時代の記述を、言語／非言語という観点から再検討した。

（１）「モデルネの言語論は子どもの言語獲得をどのように記述しているか？」

ドイツ文学で子どもというモティーフが最初に大きくクローズアップされたのが１９世紀初頭であるのに対して、言語論において子どもが注目されるのは２０世紀に入ってからである。本研究では、理論的支柱として、ベンヤミンの著作を中心とするモデルネの言語論的考察を据えて、モデルネ前史である１９世紀文学における幼年時代の記述を分析する際の手がかりとする。

（２）「幼年時代の記述において「追想」はどのような役割を果たしているか？」

幼年時代の記述には、大きく分けて二種類あると思われる。すなわち、自伝としての幼年時代の記述と、フィクションとして構築された幼年時代の記述である。しかし、あらゆる著作家にとって幼年時代とは「かつてあったもの」であり、自伝的な要素と切り離すことができないテーマでもある。本研究では、幼年時代の記述における追想・記憶の意味を明らかにするために、１９世紀の作家を研究対象として、自伝としての幼年時代とフィクションとしての幼年時代それぞれの記述を、そこに描かれているモティーフの相違という点から比較する。

（３）「子どもというテーマ圏のなかのどのようなモティーフが言語獲得の問題と関連しているか？」子どもにおける「非言語的なもの」を捉えるには、言語獲得以外にも、さまざまな視点がある。例えば、子どもの蒐集行為は、知識の収集に通じているという点で、言語の獲得と密接に関連するモティーフである。そうした言語獲得と隣接するモティーフを分析することによって、幼年時代にとって言語の獲得とはどんな意味をもつのかを明らかにする。

（４）「子ども向けの本（文字学習絵本、歌の本等）の創作理念および叙述は、歴史的にどのような変遷をたどったのか？」１９世紀初頭以降、実践的な言語習得を目的とする文字学習絵本や歌の本がさかんに出版された。本研究は、文字学習絵本や歌の本を子どもによる言語獲得に関する叙述形態のひとつとして捉え、言語論・芸術理論的な視点から研究する。１９世紀初めから２０世紀初めにかけての文字学習本等の叙述を分析することによって、それぞれの時代における非言語的な領域に対する見方の変化を明らかにする。

４．研究成果

（１）ヴァルター・ベンヤミンの著作を主たる研究対象として、モデルネの言語論における子どもの言語獲得についての論述の分析を、とくに「模倣」と「蒐集」という概念を手がかりとして行った。ベンヤミンにおける「模倣」の概念は一種の言語的能力として捉えられている。ベンヤミンは子どもを描く際には、たいてい、みずからの幼年時代と同じ、20 世紀初頭のベルリンを舞台としている。子どもは、19 世紀的ブルジョワ社会の物質に囲まれているが、子どもはこうした事物によるこの呪縛を、それらの事物を模倣することによってみずからの言語を獲得し、その呪縛から解き放たれるのである。ベンヤミンによるみずからの幼年時代の回想は、たんなる郷愁の叙述ではなく、モデルネにおける事物世界に囲まれた子どもを記述しようとする試み

であると言える。
　また、ベンヤミンは、「蒐集」という概念を歴史哲学と関連づけて理論的に考察したばかりでなく、自身が一流の蒐集家でもあり、なかでも子どもの本を熱心に集めていた。ベンヤミンは蒐集家に二つの役割を認めている。ひとつは、蒐集した事物を既存の意味連関や機能連関から切り離して、別の新たな連関の構成要素となすことであり、いまひとつは、蒐集された事物の過去を歴史的体系として構築することである。ベンヤミンによれば、この歴史的体系の構築は、具体的には、文字による記述というかたちをとる。ベンヤミンによる子どもの本の蒐集は、そうした歴史的体系の記述のひとつと見なすことができる。彼が蒐集した子どもの本のなかには、「字習い絵本（Fibel）」という注目すべきジャンルがあるが、このジャンルのテーマは、子どもが文字を練習して書けるようになること、すなわち、子どもによる文字体系の構築である。いわば文字の蒐集をテーマとする「字習い絵本」を蒐集するという行為は、したがって、文字体系の獲得という歴史を、体系的に記述する試みの一例と見なすことができる。
（２）クレメンス・ブレンターノの著作を主たる研究対象として、１９世紀における子どもと言語の関係、および子どもの言語についての見方を明らかにした。ドイツ・ロマン主義は「子ども」を文学のテーマとして発見し、しばしば作品の中心的形象となした。そうしたロマン主義の作家の多くが、子どもを「聖なるもの」あるいは「教育の対象」と見なしたのに対して、ブレンターノは子どもを言語的な側面から捉えていた。ブレンターノにおける子どもは、沈黙と言語のあいだに位置する存在、すなわち、言語を学びつつある存在として規定することができる。そしてブレンターノは、子どもは言語（とりわけ文字）を学ぶ際に、実は苦痛を学んでいるのだとした。ブレンターノと同じく子どもに関心を寄せていたベンヤミンも、言語をもつこと自体に苦痛が宿っていると考えた。ベンヤミンによれば、事物と名が一体化していた楽園的な言語空間を離れた人間は、事物を一回の命名で名指すことができず、過剰に命名する。ベンヤミンによれば、まさにこの不完全な言語こそが言語的な苦痛の根源である。ブレンターノにおける子どもは、言葉なき自然と、文字学習を通じて過剰命名という苦痛を負った大人との中間的存在であるという点で、ベンヤミンにおける子ども像との強い親近性を示している。しかし、ベンヤミンが、沈黙から過剰命名の言語へ、という人間の言語の歴史的な展開を不可逆なものとして捉え、幼年時代を決定的に失われたものとして描いているのに対して、ブレンターノは、「眠り」というモティーフや反復される縮小語尾によって、子どもを、言語を学びつつある存在のままに留めおいている。ブレンターノはこれによって、幼年時代という楽園的な時間は取り返しようもなく失われた、という物語をくつがえし、子どもに現在性を付与しているのだ。
　さらに、ブレンターノにおける「楽園喪失」というモティーフを言語理論的に考察した。１９世紀初頭のドイツでは、従来の価値観や考え方が、フランス革命や科学の発展によって大きく揺さぶられていた。当時の作家たちの多くは、この危機を「楽園の喪失」として認識し、みずからの立脚点を歴史研究に求めて、新たな時代を標榜しようとした。楽園喪失という事態に対して、ロマン主義においてはさまざまなアプローチが試みられた。フリードリヒ・シュレーゲルは、近代を古典古代からの断絶のうちに捉え、中世を足がかりにして近代文学が立脚すべき「新しい神話」を求め、グリム兄弟は古代ゲルマン研究を通して、ドイツ語の復興を目指した。こうした歴史的な視点に立脚するアプローチとは異なり、ブレンターノは詩論の形成に際して、子どもという、個体発生レベルでの歴史の形象に基盤を置いている。ブレンターノの『ゴッケル・メールヒェン』の初版（1817）と改版（1838）を比較し、改稿過程の分析を通じて、ブレンターノにおける子どもの言語が、縮小・反復・否定といった原理に基づくことを明らかにし、そうした子どもの言語の原理は、芸術作品を「代用楽園」として捉えるブレンターノの詩論をも構成する要素であるということを示した。初版発行からおよそ二十年を経て出版された改版には、初版には見られないブレンターノの危機意識が、「楽園の喪失」のモティーフとして、はっきりと刻印されている。改版において楽園喪失のモティーフを担っているのは、子どもという形象である。ブレンターノにおける子どもとは、完成された言語を持たない、言語を学びつつある存在であり、楽園喪失後の新たな言語の担い手である。ブレンターノにおける子どもは、楽園喪失の表象となっているのだ。このことは、ブレンターノが叙述する「子どもの言語」によっても跡付けることができる。縮小・反復・否定といった、ブレンターノにおける子どもの言語を形成する原理は、楽園喪失のしるしにほかならない。しかし、こうした否定的な要素をもつ「子どもの言語」という理念にこそ、ブレンターノが想定していたであろう、危機の時代における言語表現の可能性を読み取ることができるのだ。「子どもの言語」という理念は、芸術を「代用楽園」として捉えるブレンターノの詩論を語るものともなっている。
（３）ベンヤミンの理論の新たな読み替えの作業の一環として、ベンヤミンの作品の翻訳を行った（『ベンヤミン・コレクション５、６、７』）。担当した作品のひとつ、「言語社会学の諸問題」では、1930 年代の言語理論が扱われており、本研究のテーマでもある「子どもと言語」という問題圏を幼児心理学の観点が含まれている。それらの資料にあたるこ

とによって、本研究のために貴重な視点が得られた。また、『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』の草稿に相当する「ベルリン年代記」の翻訳に際しては、ベンヤミンがどのような推敲をすすめて、子どもと言語のかかわりを叙述したかを綿密に調査することができた。また、ベンヤミンが子どもの教育における新しい可能性をコミュニズムのなかで模索していたことが明らかとなる作品の翻訳作業においては、ベンヤミンの考える子ども像を教育という観点から捉えなおすことができた。

さらに、ドイツ芸術アカデミーのベンヤミン・アーカイヴから依頼を受けて、日本におけるベンヤミン受容について、とりわけ翻訳という観点から発表を行い、日本のベンヤミン研究の現在を国際的な研究の場に示すことができた。いすでに 1960 年代からベンヤミンを翻訳・授業してきたなかで、「子ども」というテーマが日本のベンヤミン研究においてクローズアップされてくるのは 1990 年代以降であることを示し、子どもと同時に「都市」というテーマにも注目が集まり始めたことを明らかにした。これは、都市（とりわけベルリン）における子ども像という、本研究がこれまで扱いきれなかったテーマに接続するものである。ベルリンという都市の特殊性を明らかにすることによって、そもそも言語の獲得とローカル性はどのような関係をもつのか、文学はローカル性とどの程度関わり合うのか、という問題は、大きな射程をもつ問題だと思われる。本研究は今後、子どもと言語の関係において「都市」がいかなる役割を担っているのか、という問題圏へと追究を発展させる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５　件）
①岡本　和子、「住む」,「歩く」,「書く」―ベンヤミンにおける模倣の身振り、文芸研究 120 号、査読有、2013、125-142

②岡本　和子、Die Idee der „Sprache des Kindes“ und die Poetologie bei Clemens Brentano、１９世紀学研究第 7 号、査読有、2013、109-119

③岡本　和子、クレメンス・ブレンターノ『ゴッケル・メールヒェン』における「子どもの言語」の理念と詩論、日本独文学会叢書 084 号、査読有、2011、51-62

④岡本　和子、アルニム／ブレンターノ『少年の魔法の角笛』の『子どもの歌』における子どもと言語、『あうろ～ら』第 28 号、査読有、2011、1-15

⑤岡本　和子、言語というアーカイヴ―ベンヤミンの「蒐集」をめぐって―、１９世紀学研究第 5 号、査読有、2011、 57-75

〔学会発表〕（計４　件）
① 岡本　和子、Zum Bilde Benjamins - übersetzt und zitiert ins Japanische、Benjamin Lektüren. Zur internationalen Rezeption. Ein Symposium des Walter Benjamin Archivs in der Akademie der Künste, 2013 年 9 月 19 日、ベルリン芸術アカデミー

②岡本　和子、Die Idee der „Sprache des Kindes“ und die Poetologie bei Clemens Brentano、19 世紀学学会・19 世紀学研究所・新潟大学人文学部共催国際シンポジウム Krisenbewusstsein zur Zeit der Romantik und Utopievorstellungen、2012 年 2 月 29 日、新潟大学

③岡本　和子、クレメンス・ブレンターノにおける「子どもの言語」の理念と詩論、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「ロマン派の時代の危機意識とユートピア」、2011 年 10 月 15 日、金沢大学

④岡本　和子、アルニム・ブレンターノ『少年の魔法の角笛』の『子どもの歌』における子どもと言語、2010 年度日本アイヒェンドルフ協会研究会、2010 年 5 月 30 日、慶應義塾大学（日吉）

〔図書〕（計３　件）
①浅井健二郎編訳、土合 文夫、久保 哲司、内村　博信、岡本 和子翻訳、筑摩書房、ベンヤミン・コレクション７、2014、645（岡本和子担当：177-211、390-435、458-462、483-493）

②浅井健二郎編訳、久保 哲司、岡本 和子、安徳 万貴子翻訳、筑摩書房、ベンヤミン・コレクション６、2012、702（岡本和子担当：195-217、438-553）

③浅井健二郎編訳、土合 文夫、久保 哲司、岡本 和子翻訳、筑摩書房、ベンヤミン・コレクション５、2010、617（岡本和子担当：159-205、385-420）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　岡本　和子（OKAMOTO, Kazuko）
　明治大学・文学部・准教授
　研究者番号：50407649

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：